

左の窓

泉鏡花作

全一章

今年日四月二十九日、新橋發、汽車は午前六時半  
たれども、三十日を前に控へたれば、未だ夜の明け  
ぬに出立つ。夜逃の體に似たるかた。旅馴れぬ身の  
しをらしくも心急きたるなり。柳の翠ほの／＼と、  
丸の内を馳らすれば、朝靄のやゝ動くが、車の轍に  
まとひ、薄綿の大路靜に、停車場に着く。

あわたゞしき漢の習とて、待つ問もどかしく、と  
かくして汽車に乗れば、瞬く間に品川なり。

驛路や茶屋の柳の朝ぼらけ

と同行の喜多八、句にもあらず我にもあらず眩く。  
電車の通ふ品川を驛路といふも旅の心なるべし。彌  
次はたゞ窓より顔を差出して、左手の海を視めしが、  
あけ行く漣の、旭に對して、後朝の風情ならなくに、

我が顔あまりに寐惚れたり。

こゝに携ふる處の吸筒を開き、四邊に氣を兼ねつゝ、そつと飲む。

六郷にて、

猪口を手に渡越すなり春の旅

大船にてサンドイツチを買ひ、一折を分ちて賞翫す、此の處の名物たりとぞ。

花董やゝハイカラの思あり

野もせに由縁の色のなつかしきに、いつか武藏の國も過ぎつ。箱根路近うなるほどに、山蔭なる薊一本、いと丈高きも行く春や、汽車の音も、山の姿も、おどろ／＼しくたりもて行く。

山北にて

早乙女の一人はものをおもふらし  
出征軍人を送る旗五旒ぞ立ちたりける。

佐野

げげ花や富士の裾野の二三反

沼津にて辨當を買ふ、

喜多、また半分づゝ食べるの。

彌次、人間きの悪いことをいひなさんな。大

船のはアリや洒落だ、一寸餡ころ餅といふ處よ。辨

當はちやんと二人前買びます、安心しておいで。イ

ヤ又いろ／＼名物をば食はせよう。

喜多、山北には香魚の鮓があつたつけ。

彌次黙して答へず、煙草を吹かすこと頻なり。

辨當の菜も鰯よ長閑 さよ

所謂上等なゝるものにあらず、なみにて鯛の尾頭  
はおよびもなし。

この驛より、六十餘の老爺、少き京美人と同伴た

るが乗込む。箱根の温泉のかへりと見えたり。女、  
おゆるしやと前を通る。

女つれてつむり光の春の人

曰く老爺を嘲る也、或はいふ羨む也。

一原（午後一時）

永き日を馬車に乗り行く飴屋かな

驟路にドンドコドンドコゆるき調子の太鼓聞えて、  
荷とゝもに飴屋が乗りて、悠々と馬車こそ通れ。

野の花は董たんぽぽ、黄に又紫に、おのがじゝ咲  
きたる中を、汽車の衝と過ぐる、至る處色鳥の亂れ  
飛ぶ状なりしが。此のあたり又一入紫雲英の花盛に  
て、彼の田も、此の田も、あれ／＼といふまゝに、  
左右前後皆薄紅の日中なる、苗代蒼く富士白し。

紅のげげの花川見ゆるなり

吉原よしはらにてお天気曇てんきくもる。

薄雲うすくもや野末のすゑはげげの花明はなあかり

かけ川かはの宿しゆくにて、停車場ステーションより此方こなたを差覗さしのぞく者ものあり、  
柳やなぎの黒髪くろかみ、島田しまだにや、由井ゆゐに行くゆく？ と見るみ間にま

菜なの花はなをちよと掛川かけがはや水車みづぐるま

小夜さよの中山晚景なかやまばんけい。

古寺ふるでらや谷たにをこぞりて鳴く蛙かはづ

このあたりより雨あまもよひとなる。程ほどなく大井川おほゐがは近ちかづけば、前途遙ゆくてはるかに黄昏たそがれの雲くもの中に、さゝ濁にごりの大たい河がの色いろ、輝かがやくが如ごとくに見みゆる、今いまの間にま富士ふじの、後あとたる方かたに遠とほざかり行く心こゝち地ちすめり。

ぼつり／＼と降ふり出いでつ。唯見とみれば、鳶とび、鳥からす、凧いかのぼり  
一ツ飛とべり。

袋井ふくろゑにて颯さと降り出だす。彼方かなたたる町まちの中なかは、森もりの高たかきに包つまれて、家毎やしとに逢あふ魔まが時ときなりや、茶店ちやみせの旗はたもせはしきが中なかにもなの寂さびし。汽車きしやは濡ぬれ色美いろづしく、煙けむりが淡あはく吐はきつゝ留とまれり。

時ときに停車場ステーションたる瓦斯燈がすとつフト見みえつ。(ベツかつこをしたやうな瓦斯燈がすとつの畫ゑあり、略之これをりやくす)。同行二どうかう人にんいづれも美人携背びじんけいたいの件くだんの老爺らうやに憤いきどほる如ごとき、風流ふうりうは解かいしながら、以もつての外ほかの臆病漢おくびやうもの、箱根はこねより西にしなればぞ尚なほ驚おどろきぬる。

これにつけて、おもへらく、江戸えどたる我わが家主おほや様さま太郎兵衛ま氏の女むすめ、十とをばかりになりたるが、また極きはめてものおぢする性さがにして、卵うの花はなの暗やみに迷まよび、木むく槿げの炎ほのほに膽きもを冷ひやす、但たゞ店子たなこの如ごとく、女ぢよし子みと三十日みそかを恐おそれざるのみ。

赤坂あかさかの先祖せんぞならねども、おどしてやらんと、鉛筆えんぴつもて、豫かねて持参ぢさんの葉書はがきの表おもてに、これを圖づして、さて書かきつく。

Eukuroi (道中雙六參照)

ちよいと、こんなお化が居たの、恐くはな  
つて？

月 日 彌二郎兵衛

おうちゃん

雨次第に烈し。

天龍川大雨

天龍や篠を束ねて春の雨

濱名の湖は渺としてたゞ暗かりけり。ふた川あた  
り、ちら／＼と田家の灯。

かくて豊橋に着く。彌次は左の方に居たり。其の  
窓をあけて差覗けば、停車場の柳また圖の如し。

(柳の化けたる晝あり、又略之) 恐くはなくツて、  
とおどせしは今し方よ、人をのろはゞ穴二ツ、おそ  
ろしかりける事どもなり。

御油ごゆに至りて風情ふせい異ことたり。屋根やねをつたふ雲しじくとく／＼、瓦斯燈がすとうの影かげに遅櫻枝おそめくわえだもたわゝなるが窓まど近ちかう咲亂さきみだれて、葉はも明あかく、花はなの露つゆ、はら／＼と今留いまとまりし汽車きしの名残なごりに靡なびき留やまず、居あながら掌たなそこに汲くむべかりけり。

葉櫻はざくらに御油ごゆの灯ともしや宵よひの雨あめ

風情ふせいなるかな、即ち杯すなはにうけて喜多きたと又飲またみはじむ。彼處かしこにも此處こゝにも人寝ひとねたり。老爺らうやの如ごときは、美人びじんの膝ひざを枕まくらしき。彼かれもさしうつむくや、雨あめをいとふらん。汽車出きしやいでつ、窓まどを塞ふさぐ。

【完】